

会報

No. 100

平成31(2019)年3月15日

http://www.library.pref.kyoto.jp/?page_id=28

京都府図書館等連絡協議会

事務局

京都市左京区岡崎成勝寺町

京都府立図書館内

TEL (075) 762-4655

<目次>

1面

・会報「100号」に寄せて
(南丹市立中央図書館長
京都府図書館等連絡協議会長)

2～3面

・会報100号のあゆみ

4面

・第7回「子ども読書
本のしおりコンテスト」

4面～6面

・実務研修会実施報告・参加報告



会報「100号」に寄せて

南丹市立中央図書館長
京都府図書館等連絡協議会長

西 亜希子

京都府図書館等連絡協議会の会報は、昭和五十八年六月から発行され、平成最後の節目の時に一〇〇号を迎えます。この記念すべき会報に一文を寄せることができますことを、大変光栄に存じます。

図書館活動の活性化をめざして創

刊された会報は、京都府図書館等連絡協議会のさまざまな活動や取組の報告、参加館の図書館職員の皆様から寄せられたその時々旬な情報など、図書館に関する情報発信を行ってききました。関わってこられた多くの皆様の功績が積み重ねられ、現在に至っていることを、感慨深く思います。

振り返りますと、京都府図書館等連絡協議会は昭和五十一年六月に京都府内の図書館事業等の振興及び相互間の協力を図ることを目的として発足し、歴代の会長様をはじめ、図書館業務に係る職員の皆様、事務局の皆様のお力により、発足当初には想像もしていなかったような事業が多く生みだされました。ネットワークの構築などもその一例ですが、変化する時代の流れに沿いながら、利用者の方々へ資料と施設を提供すべく、府内図書館の相互協力のもと、京都府図書館等連絡協議会は活動を発展させて参りました。

私自身は、図書館業務に携わった年数が浅いため、現在、快適に行っている相互貸借業務を普通のことと感じていますが、発足当時はどうだったでしょうか。

長年、図書館に勤めている当館の職員から聞きましたことを少し紹介させていただきます。

① K・L i b n e t 稼働以前の相互貸借は、まず自館が採っている資料のタイトル等を用紙に書き込み、F a x で府立図書館の振興課(当時)に送る。すると折り返しF a x が届き、府立図書館になりものについては、「これは〇〇図書館にある、これは△△図書館にある……」と記入されているので、今度は〇〇図書館や△△図書館に直接F a x で一冊、一冊借受要求をする……という大変手間がかかる方法で行っていました。今は横断検索館も多くなり、資料の内容や表紙まで見られるのは素晴らしい進歩と思います。

② 今、連絡車は各市町村の中央館を中心に回っていますが、合併以前は現在の分館・分室にあたる図書館・図書施設まで回っていました。京都市内からノーマルタイヤで来られた連絡車が北部の大雪山の中、動けなくなり、図書館職員が後ろから押してやっと発進できた……と

いった、当時の様子が目に見えるようなエピソードがありました。

③週一回だった連絡車が週二回になりました。利用者に早く資料を届けられるのはとても嬉しいことです。

当時のことを御存知の図書館職員の方には懐かしく思われるかもしれませんが、図書館等連絡協議会の今日までの取組は大変ありがたいと、どなたも感じられることでしょう。

これからも多様で複雑な社会の変化の中、図書館に対して期待されるものは、ますます大きくなるでしょう。本会が京都府内の図書館の発展に重要な機関として存在し、参加館の皆様と共に進んでいけたらと思います。

会報一〇〇号の発行を一つの節目として、これからも利用者の方々のニーズに応えられる図書館をめざし、様々な取組の紹介や情報をこの会報から発信していくとともに、京都府内の図書館相互の協力が充実したものととなり、本会の活動がより活発に推進していくことを心より願っております。

【第一号】

(昭和五十八(一九八三)年六月)

記念すべき第一号は、四ページ建て。巻頭には、当時の澤田種治京図連協会長

会報第100号のあゆみ

京図連協の「会報」は、今号で記念すべき第100号を迎えます。そこで、いくつかのトピックから振り返ります。

の「ごあいさつ」や森

行夫前副会長からの「お手紙」、現在まで続く定期総会の記事、さらに、「図書館協力貸出」発

足 京都府立図書館「第二国立国会図書館関西プロジェクトチームの動き」といった、今から思うと少しびっくりするようなニュースも。

【第六号】

(昭和六十(一九八五)年三月)

第六号には、「分担金の値上げ」や、現在はなくなってしまった「一



会報発行のごあいさつ

泊実務研修に参加して」といった記事、さらに、「京都南部都市広域行政圏図書館連絡協議が発足」「連絡協力車、試験的運行されるー京都府立図書館」といった記事が。

このあたりから、府内の新館の建設についての記事や、それに伴う京図連協への新加盟紹介の記事が多く見られるように。第十一号(昭和六十一(一九八六)年十一月)には、京都ライトハウスの加盟の記事も

【第二十号】

(平成元(一九八九)年十一月)

現在ではK・L・i・b・n・e・tに取り込まれている「(京都府公共図書館等所蔵)雑誌・新聞総合目録」刊行」という記事。

【第二十九号】

(平成四(一九九二)年十二月)

「フォーラムくらしと図書館 京都図書館大会開かれる」の記事。振り返ってみると、この会が第一回の京都図書館大会となり、以降、時期や会場を変えつつも、毎年開催されることになりました。ちなみに、この号は、図書館大会の詳細報告もあり、これまでの会報で唯一の八ページ建て。

(これまで発行された会報を並べたところ)



【第三十四号】

(平成六(一九九四)年十月)

「京図連」 “京図協” の二通りで呼ばれている当協議会の略称、いっそのこと “京図連協” と統一すればどうでしょう。」という文章が。翌年、会則の改訂で「京図連協」が正式な略称に。

【第三十九号】

(平成八(一九九六)年三月)

『『府立図書館改築』報じられる!』の記事。ここから、新府立図書館の建設及びそれに伴う京都府図書館総合目録ネットワーク(K・L i b n e t) 関係の記事が増加。

【第五十号】

(平成十二(二〇〇〇)年一月)

そのような中、第五十号が発行。第一号にも寄稿されている澤田元会

長の「会報創刊号発行のころ」が掲載。

【第五十八号】

(平成十四(二〇〇二)年八月)

子ども読書に特に注目の集まった時期。京図連協でも「独立行政法人オリピック記念青少年総合センター」の実施する「子どもゆめ基金助成事業」の認定を受け、「子どもと読書を考える中央フォーラム」や、府内各地で指導者研修会を実施。また、第六十号には、「子ども読書絵てがみコンテスト」の記事も。

【第六十三号】

(平成十六(二〇〇四)年三月)

市町村合併が続き、丹後六町の合併に伴う加盟館の変更の記事が。このあとも、京丹波町、南丹市、与謝野町、福知山市と続きました。第六十九号には「市町村合併に伴う図書館等の名称変更について」の一覧表も。

【第六十六号】

(平成十七(二〇〇五)年三月)

続く第六十七号も併せ、台風二十三号による図書館の被災のニュース。

約十年後の第九十号(平成二十六(二〇一四)年三月)では、台風十八号による福知山と舞鶴の被災の様子も。

【第八十四号】

(平成二十三(二〇一一)年八月)

東日本大震災にあった福島県の図書館を支援するため、福島県立図書館へ計九七一二冊をお届け。

【第八十七号】

(平成二十四(二〇一二)年九月)

紙とデジタルとの融合を表明し、内容の充実を図り、これまでの年三回から年二回の発行に。

【第九十一号】

(平成二十六(二〇一四)年九月)

綾部市図書館の「読書手帳」についての記事。さらに、続く第九十二号でも、同じく宇治市の「どくしょつうちょう」についての記事が巻頭を飾っています。当時の関心の高さが伺えます。

【第九十三号】

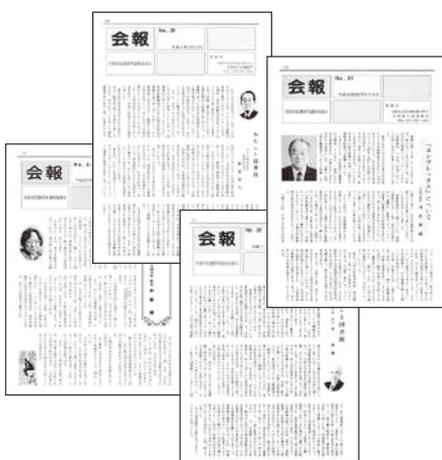
(平成二十七(二〇一五)年九月)

京都府立総合資料館の「ライブラ

リーオブ・ザ・イヤー」受賞の記事。府内では初となりました。また、第九十五号から三号に渡って、同館の閉館と京都学・歴史館の開館に関する記事が掲載されました。

この他にも会報には、府内の図書館・読書施設の動向を知る上で重要な記事が多くあります。京図連協のホームページ (https://www.library.pref.kyoto.jp/?page_id=3012) に全号のPDFファイルがありますので、ぜひご活用ください。

「巻頭言」には、京セラの稲盛会長、当時の河合隼雄文化庁長官、裏千家千宗室家元、万葉学者の中西進京都市中央・右京中央図書館館長等、多彩な方々に御寄稿いただきました。



第七回
「子ども読書
本のしおり
コンテスト」

今年度は九五〇〇点を超える作品の中から、最優秀賞二点、優秀賞二十一点、佳作一〇一点が選ばれ、十一月四日（日）に表彰式が開催されました。現在、市町村巡回展示中です。



場所 宮津市福祉教育総合プラザ
講師 永崎みさと氏

◎中部会場 十一月十六日（金）
テーマ「図書館とボードゲーム」
場所 京都府立図書館
講師 高倉暁大氏

◎南部会場 十一月二十八日（水）
テーマ「図書館とSNS」
場所 アスパア山城
講師 吉田竜太郎氏
(田原市中央図書館)

北部研修参加報告
舞鶴市立西図書館 竹田 千明

おはなし会を行うときに、絵本を続けて読むと途中から子ども達の気が逸れてしまうけれど、パネルシアターや手遊びなどを間に入れることでぐっと注目してもらえたという経験があります。赤ちゃん向けのおはなし会では、よりその効果を強く感じます。今回は『パネルシアターで歌って遊ぼう！』（かもがわ出版）や『さあ遊ぼう！みんなよつといで！手袋人形を作って遊ぼう』（かもがわ出

版）などを出版されている永崎みさとさんが講師ということで、惹きつける演目や演じ方を学ばせていただきたいと思い参加しました。

永崎さんの研修会に参加したことのある先輩職員からとても面白かったという感想を聞いていたため、楽しみにしていた研修会。少し早めに到着したところ、「せつかくなので……」と開始時間前にもかかわらず、早速パネルシアターを実演してくださいました。サービスピリットな温かいお人柄に触れ、和やかな雰囲気での研修会が始まりました。

パンパ パンパ パツパツパンの繰り返しを楽しめる『ぞうのパンやさん』や、「まるいものつてどんなものがあるかな？」とクイズ形式になっている『まるさんかくしかく』などのパネルシアターは、思わず口ずさんでしまうリズムで引き込まれました。それから仕掛けのあるパネルシアターの作りについても見せていただきました。「ちよつとした仕掛けでとても反応が良くなる」とおっしゃっていたとおり、糸をつけたり切り込みを入れたりすることで、さらに楽しくなります。また、

楽しく面白くだけではなく、ほっこりと温かい『しゃぼん玉とばせ』や『ぞうさん』は、参加される親子の気持ちになって心地良い雰囲気になりました。



講師による実演の様子

数多く披露していただいた中で特に印象に残っているのは、『でんしゃのつて』（とよたかずひこ著／アリス館）をエプロンシアターにされたものです。羊毛を針でチクチクと刺すことで形を整えてできる羊毛フェルトのふわふわと優しい雰囲気、物語の世界観や永崎さんの語り口と合っていてとても素敵な作品でした。
自分で動きや仕掛けを考えて作製

実務研修会 実施報告

◎北部会場 十二月五日（水）
テーマ「赤ちゃん向け親子のふれあい遊び」

されるものもあれば、本を題材に作られるものもあるそうです。一回作れば何度でも使えるのが良いところ。しかし、労力を費やして作り上げた作品でも、一度きりで使わなくなってしまうものもあり、子ども達の反応だけでなく、著作権の問題で使用できなかったケースがあるとのことでした。

その他にも、『キャベツの中から』や『にわとりとひよこ』などの手袋シアターやハンカチ遊びを紹介していただきました。参加者が子ども役となって歌ったり踊ったりと盛り上がる場面もあり、限られた時間の中大変密度の濃い有意義な研修会となりました。

今回紹介いただいた演目や著書を参考にし、参加される子ども達の良い読書体験のきっかけとなるような充実したおはなし会ができるよう努めていきたいです。

中部研修参加報告

京都市・歴史館 藤原 直幸

実は学生時代、ボードゲームでかなり遊んでいましたが、ずっと図書

館との接点はないものだと思っていました。それが図書館総合展で図書館でボードゲームをしようというフォーラムが開催され、注目されるようになりました。そこで、昔からのファンとして今回の中部研修では図書館とボードゲームの研修を開催することにしました。

講師には図書館総合展のフォーラムでも発表され、図書館でボードゲームのイベントを多数開催されている高倉暁大氏を招き、実際に図書館でボードゲームのイベントを企画する意義や開催時の注意点等について、経験に基づいた実践的な講義をしていただきました。

研修には二十七名と多くの参加があり、当日は会場内に講師が図書館向けのボードゲームの説明と実物展示され、開始前からじっくりと見ている参加者が多く、図書館員の中にも関心のあるテーマだったことがわかりました。

講義では、まず図書館で開催する意義については、図書館法の定義にあるレクリエーションを提供するためであり、コミュニケーションツールやサードプレイスとして、また子育て支援としての目的が考えられる

との解説がありました。

次に、企画をする際には「なぜするのか」を自分の中で決めることと、対象年齢を決めることが重要であるとのことでした。また開催する意義と照らし合わせると、参加者を途中で排除するゲームは使用しないほうが良いとのことでした。

さらに、イベントスタッフは職員だけでは難しいので、ボランティアや外部スタッフと連携する必要があるが、きちんと打ち合わせしないと、後々トラブルになりやすいということも教えていただきました。

後半は、実際にボードゲーム体験会を行いました。当初は講師一人で実施する予定でしたが、参加者が多かったこともあり、急遽私も説明役として二つのテーブルで実施しました。講師のテーブルは簡単に終わるものを中心にいくつか遊び、私の方は持参した『バスルートを作る』（京都市交通局版）をじっくりと体験してもらうことにしました。それでも全員は参加できないので、参加できない人は周りでゲームの様子を観覧して、雰囲気だけでも感じてもらおうようにしました。

どちらのテーブルも盛り上がり、

時間ぎりぎりまでゲームを楽しんでいて、その後の質疑応答も盛況でした。更に研修会終了後も展示しているゲームを見たり、講師に質問をしたりと、積極的に参加者の関心の高さが伺える研修でした。

今はどこの図書館も、青少年を図書館に呼び込むことに苦労しているようです。ボードゲームは年齢に関係なく楽しめ、そこから図書館の資料へと誘導することも可能であるので、ボードゲームが少しでも手助けになれば嬉しいと個人的に思っています。

いつか自分の勤務している図書館



ボードゲーム体験会の様子

でも、ボードゲームイベントを開催したいと決意も新たにした研修でした。

南部研修参加報告

井手町図書館 鈴木 浩史

今年度の南部研修では、各地で活用が広がっているSNS（TwitterやFacebookなど）について、田原市図書館から吉田竜太郎氏をお招きし、同館での事例をお話しいただきました。

田原市図書館は、愛知県にある中央館と二分館の三館からなる直営館です。館長以下正規・非正規を問わず、アイデアや意見を出しやすい風通しの良い職場だそうです。

田原市図書館のTwitterアカウントは平成二十五年に運用が始められました。一方的な情報発信よりも、SNSが持つ「双方向性」を活かし、「フォローや返信も随時行う」「直接業務に関係しない個人の日常や感想なども投稿する」などとする運用方針を策定しました。

その結果、展示の紹介やイベントの告知などに交じって「男子職員ア

イス早食い大会」「市のゆるキャラとのしりとり」対決」などの企画がTwitter上で展開され、国立国会図書館のカレントアウェアネスでも紹介されるなど注目を集めました。また平成二十七年から始めたFacebookでも、エイプリルフールに合わせて「図書館の屋上にプールを設置」「しりとり対決の結果、ゆるキャラが新館長に就任」などのジョーク記事が話題をさらっています。

このように「ユルい」田原市図書館のSNSですが、その裏には確かな目的意識が隠れています。それは端的に言えば「図書館のSNSは広報誌ではない」ということです。

吉田氏によれば、SNSで積極的に図書館の情報を拾いたいと思っているユーザはごく一部に過ぎず、大多数は「なんとなく」図書館のアカウントをフォローし、その日の気分によって読んだり読まなかったり。そんな所へ広報誌のように一方的に告知を投稿するだけでは、つまらないアカウントと見なされ、読み流されてしまいます。

そうではなく、見かけた人の話題になるような面白さ、親しみやすさ

を志向することでより注目度が増し、届けたい情報も目に留まりやすくなる。図書館という行政機関が「おなかすいた」等といった投稿をする意外性も利用して、「読んでもらえぬアカウント」を目指すことが田原市図書館の戦略なのです。

こうした取組をするにあたり、参考にしたのが「あなたの図書館のTwitterをレベルアップするための10のルール」というカレントアウェアネスの記事（二〇一三年九月）です。そのうち特に重視したという、

1. あなたの図書館についてツイートするのは四回に一回の割合にする

↓個人の日常や市内のニュース、近隣図書館のツイートをリツイートするなど

2. ツイートを分析する
↓Twitterの分析機能（アナリティクス）を活用し、

こちらの投稿に対してユーザがどんな反応を示したかを詳細に分析する

5. 大事なことは四回ツイートする
↓ユーザの見るタイミングと、

図書館が投稿するタイミングが一致するとは限らない
↓イベントの告知などは期間中繰り返し投稿するのが良い

7. 質問する
↓発信するだけでなく、意見を募集するなど「双方向性」を活かす

↓ユーザから寄せられるアイデアで新たな企画が生まれることも

の四つが実際のツイートを使った紹介されました。

最後に吉田氏は「多くの住民にとって図書館の運営は他人事」であり、SNSでのコミュニケーションによってそれを「自分事」に変えることで、「図書館ファン」が生まれる、と語っていました。中高生や壮年期男性など、図書館を利用しない住民への訴求力として、今後SNSは存在感を増していくと感じました。

|| 会報をホームページに掲載 ||

京都府図書館等連絡協議会のホームページ（URLは一面参照）に全文掲載しています。